


 医師


顎変形症への外科的矯正治療について

第二歯科口腔外科部長 鶴迫 伸一

4月より第二歯科口腔外科部長として着任いたしました鶴迫伸一と申します。

歯科口腔外科の診療は、口や顎の手術が必要となる疾患が対象ですが、その多くは埋伏智歯(親知らず)の抜歯などの小手術です。埋伏智歯は叢生(歯並びのガタガタ)、智歯周囲炎、う蝕(細菌で歯が溶けて欠損すること)等の原因となるため抜歯が必要となります。当院では年間約300件の抜歯を行っておりますが、10~20歳代の患者さんが多く、複数の智歯抜歯は、術中に不安や苦痛がないよう麻酔を行い、術後疼痛や後出血で困らないよう翌朝まで入院管理いたします。

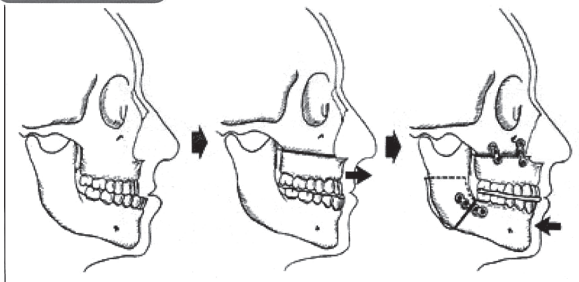
また、私の専門は「顎変形症」の外科的矯正治療ですが、地域の矯正専門医から紹介いただき年間約50件の顎矯正手術を行っております。「顎変形症」は上下の顎の骨の不調和により咬合不全が起きる疾患ですが、症状が軽度の場合は、最近ではミニスクリューやプレートなどの矯正用インプラント(Temporary Anchorage Device:TAD)を用いて治療できる場合もあり、これを年間約40件行っており

ます。

顎骨の不調和が大きい場合には顎矯正手術の適応になります。患者さんのご希望を伺ったうえで、矯正医と外科医で治療計画を立て、半年~1年半かけて術前歯列矯正を行った後に顎矯正手術を行います。全身麻酔をかけて、手術方法は主に上顎はLeFort I型骨切り術、下顎は下顎枝矢状分割術(SSRO)を行い、骨片はチタン製ミニプレートで固定します。手術後は約5日間の顎間固定を行い、その間は経口流動食となります。顎間固定解除後は開口訓練を行い、日常生活に支障のない状態で退院となります。

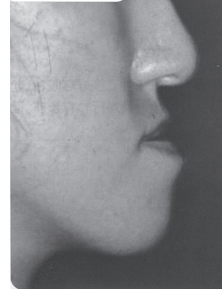
顎矯正手術は手術書にも非常に困難と記載されてきた手術ですが、安全に行うための手術機器の開発、手術手技の改良により標準化され、国内でも年間約3000例の手術が行われております。また、顎矯正手術は矯正治療も含めて健康保険の適用が受けられます。うけ口、お顔のゆがみ、噛み合わせの不具合、顎関節症など、顎変形症の症状は様々ですが、気になるような症状がございましたらお気軽にご相談いただければ幸いです。

上下顎移動術

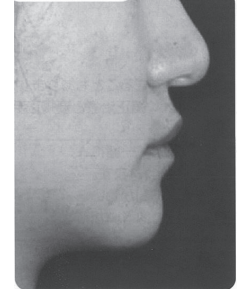


上顎にLeFort I型骨切り術、下顎に下顎枝矢状分割術を適用

術前の側貌



術後の側貌



外科的矯正治療によって咬合とともに容貌も改善する

出典：社団法人日本口腔外科学会